

## これからの地方大学に求められていること

先日、「観光による地域づくり勉強会」に出席するため豊前市役所に行きました。本学は平成26年から5年間、地域コミュニティの中核的存在として地域課題の解決に貢献する地(知)の拠点事業いわゆるCOC事業に取り組んだ実績があります。そこで大学側から人口減少に悩む豊前市や豊前市観光協会に呼び掛け、産学官が連携して交流・転入人口を増やす勉強会を設けることを提案したのです。

豊前市は小倉から大分方向に約40km南にある人口約2万5千人の小さな市です。南に修験道で有名な求菩提山が控え北は周防灘に面する自然豊かな所です。近年は北部九州に立地する自動車産業向けの部品メーカーの立地も進んでいますが、人口減少と高齢化(36%)が悩みの地方都市です。

ところで「豊前」という名称は律令制に基づいた国名で7世紀後半から明治になるまで現在の福岡県東部から大分県北部に用いられたものです。まさに九州を構成する国名の1つです。江戸時代に譜代大名であった小笠原氏が治めていたこともあり、廃藩置県の際に大分県と福岡県とに分割され消滅した経緯があります。このため隣接する大分県中津市とは今でも深いつながりがあります。

勉強会には地元から観光協会、市役所、商工会議所の担当者に加えいろいろなボランティア活動をされている方々約20名が、大学からは4名が参加しました。まず私から、交通拠点性を無くして人口が激減した門司港を観光地化して活性化を目指している「門司港レトロ事業」の事例を紹介しました。次に豊前市で自慢できるものを皆さんから上げてもらい、どうすれば観光客を呼べるかフリーディスカッションを行いました。見どころは多いがとびぬけた名所がないこと、信心深い人が多く空き家のリノベーションを仏壇が邪魔していること、京築ヒノキという可能性ある素材があることなど多くの共通認識が出来ました。今後、専門が異なる先生方の参加も得て議論を深めたいと考えています。

## コロナ禍の「第53回美夜古祭」に思う

大学に隣接する大熊公園の金木犀の香りが薄れるのを待っていたかのようにジョウビタキの「ヒーヒッ」という鳴き声が聞こえるようになりました。昨日は朝から大学祭準備のためオレンジのつなぎを着た実行委員会の学生たちが学内を忙しく走り回っていました。コロナ禍、開催するかどうか悩んだのですが、31日から二日間、規模を縮小し三密を避けて実施することになりました。

午前11時からの開会式を終え風船が青空に向けて放たれ大学祭が始まりました。企画した学生たちは、模擬店の数を減らしたり、大規模なコンサートをお笑いライブに変更したりして工夫してくれました。そのような中、例年にない企画として工学とデザインの融合という本学のブランドを实践するため学部を越えたイルミネーション企画を目玉に仕立ててくれました。31日は10月2度目の満月です。今年は赤く輝く火星も月に寄り添って晴れた夜空に輝きイルミネーション企画の点灯式を空から応援してくれているようで感動しました。

ところで、大学祭の「美夜古」という名前ですが、大学が所在する地名からとったものです。日本書紀によると現在の福岡県京都郡は第12代景行天皇が熊襲征伐の際、この地に行宮を置いたことから都(みやこ)と呼ばれるようになりその表記に万葉仮名の美夜古が使われたことに由来しているそうです。近くに国府や国分寺跡もあり、この地が古墳時代から各種の困難や変革を乗り越えて続いている歴史を感じます。

コロナ禍を克服しても今までは違う世界が待っています。どのような時代にあっても、力を合わせて共通の目標に向かって困難を克服する体験は重要です。

感染予防対策のためマスクをつけて三密を避ける配慮をしながら校門で検温して案内する学生たちを見ていると、大学祭をやり遂げた体験が次世代を乗り越える力に変化し、歴史が継続することを予感しました。